キリシタン版における「分」の用法について

柴田雅生

一 はじめに

イエズス会天草林刊の『平家物語』（五九年刊、以下天草版平
家と称する）の末尾に、喜一検校の次のような言葉が続く。
「そこでしかるべきことひとつを語りまざりだより、退屈な
う聞かせられたを奇形と存する。平家由來の大略この分で
go、どこでもも、物語にいと。こたえもぎとうどをうた
せられほどに、重宝でござる。」

この言葉は当時ながら原平家には見られなかった。天草版平
家の冒頭に記されている。喜二検校の坊、平家の由来が
いたいにつれ、あらかじめして語りぬ。と、詩寄によって喜一検校が
語り始めるという、

天草版独自の対話形式で繰られているからである。

この部分に「分」という言葉が使われている。ここでは「程度・状
況」といったほどの意味であるが、元々は「一部」の意であったのが
意味用法上の変化によって形式名詞となった例である。天草版平
家ではこのほかにも「分」が十四例用いられている。

二 キリシタン版における「分」の用法記述

右では天草版平家において喜一検校の言葉から引用したが、同書
において右馬の先の言葉として使われている「分」は次の二例である。

- 本書は平家の行動についての、後者は平家一門の行動についての、そ
れぞれ喜一検校が語り上げている点を注目すべき。

一方、同書には、連体詞を上接しない「分」も三例見られる。原平家
の代表例として百五十句の本文を含めて示す。

・下部参ってきさと奉れと。なぜならば分てなよとして申さくこ
がし奉れとは。汝らいかでか申べ。巻四・信伝合戦

・大名一人ら勢をもたぬ分で五百騎にお劣りまらぬ。巻二・国

NII-Electronic Library Service
表2
サントの御業を

<table>
<thead>
<tr>
<th>水分</th>
<th>サントの御業</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>29</td>
<td>4 2 1 3 2 5 3 7 1 1</td>
<td>29 77</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>1 1 1 1</td>
<td>3 9</td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
<td>1 1</td>
<td>1 8</td>
</tr>
<tr>
<td>25</td>
<td>4 2 3 2 5 2 6 1 1</td>
<td>25 42</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>水分</th>
<th>サントの御業</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>29</td>
<td>4 2 1 3 2 5 3 7 1 1</td>
<td>29 77</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>1 1 1 1</td>
<td>3 9</td>
</tr>
<tr>
<td>1</td>
<td>1 1</td>
<td>1 8</td>
</tr>
<tr>
<td>25</td>
<td>4 2 3 2 5 2 6 1 1</td>
<td>25 42</td>
</tr>
</tbody>
</table>
味意な思動よない見そぢむ、一.

第ニ第(に)ご動詞やる「論」デ kho「リ

つ香名詞種ア「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気」リス「気'
この乳液を含む、ごく甘露の味を含ませ給ひ、後に八割食になれさせる給ふ者を（柴やと）とある。

人のそれは次ののような用例を含めてよいかも知れない。

・ この儀もともなりに同心得、我道具をととのうる間、又日

・ 悪逆の道にたかれて、帰り道に羨される、御直を知る事なしとふべし。

・ 恕い者に常に怒る、（柴やと）とある。

しかし、それとてもほど用例数は多くなく、条件表現のみをとって、

へにこれにこのような違いが生じているのか。

狂言台本とキリシタン版では、かなり異質な用法となっているので、

選ばず、大拡しに近い。

「〜昭」として、穴に入れ、

このこと、最初に触れた「天草版平家」「原平家」の関係にも通じる。

「〜昭」として、穴に入れ、

このこと、最初に触れた「天草版平家」「原平家」の関係にも通じる。

「〜昭」として、穴に入れ、

このこと、最初に触れた「天草版平家」「原平家」の関係にも通じる。

「〜昭」として、穴に入れ、

このこと、最初に触れた「天草版平家」「原平家」の関係にも通じる。

「〜昭」として、穴に入れ、

このこと、最初に触れた「天草版平家」「原平家」の関係にも通じる。
五 おわりに

「日本国語大辞典（第2版）」において、「この分」、「その分」の出典例は、もともと世阿弥の著作であるが、かやうなる物語を、殊に、摘懸りの遺見の風体、声喩意曲を塑めて、作曲どし、（三選）

世阿弥の著作に、この他にも「分」の使用を比較的多数見ることが出来、キリシタン版の「分」も譜曲に関連するとと思われる部分が、多数見られる。キリシタンたちが、舞の本、にも通観していたことは、ロドレーゲス『日本小詞典』にも詳しい。

法で取り扱う用例の範囲では、大きた違いないが、百一十本を基本として考え変わっていくこととなる。

序止の古国語版の、その分。その分、はその分。その分を指摘し、それが明確な認識のことも使用されていることを確証することができるのか。抄書等も含めた幅広い調査によって明らかにされていきたい。それと同時に、文化史的見地からの検討を加え、一字漢語の多様な用法を裏付けていきたい。